

## 小児診療の新しい潮流 わたしの目指す小児感染症医 司会のことば

<sup>1</sup>慶應義塾大学医学部感染制御センター、<sup>2</sup>旭川厚生病院小児科

岩田 敏<sup>1</sup>、坂田 宏<sup>2</sup>

小児診療において、感染症は極めて重要な疾患です。例えば市中病院における外来受診者の約 3/4 は感染症であり、そのうち 3/4 は呼吸器感染症が占めています。また小児領域では、免疫学的に未熟な新生児、乳児を取り扱うこと、小児期に多い伝染性疾患があること、同じ疾患であっても月齢・年齢により主要な原因微生物が異なっていること、小児期に行なわなければならない予防接種が多くあることなど、小児に特有の感染症に関する問題点があります。そうした背景から、小児科医には小児総合診療の一環として、感染症のマネジメントをできることが求められていますが、一方では、小児領域においても、成人領域と同様に、さらに一步、二歩と踏み込んだ形での専門的な感染症診療の重要性がクローズアップされております。特に救急医療や集中治療の現場、血液疾患・悪性腫瘍・自己免疫疾患などの治療の場においては、高度の専門性が必要とされています。また、感染症科や感染制御部などの感染症に特化した診療部門の整備により、小児科医であっても、診療科横断的に幅広い領域の患者さんを対象に感染症診療を行う立場におかれることも多くなってきています。さらに感染症のグローバル化に伴い、国際的な感染症への対応という部分も重要視されています。

そのような時代の流れの中で、小児診療の新しい潮流としての小児感染症医を目指す医師の目標となるように、本シンポジウムにおいては、小児感染症医として活躍している第一線の先生方をシンポジストとしてお招きし、小児感染症医の存在意義とその目指す方向性について、ご自身の経験から語っていただくことにいたしました。長野県立こども病院総合小児科の笠井正志先生には「小児救急と地域医療」、東京都立小児総合医療センター感染症科の堀越裕歩先生には「国際保健」、国立成育医療研究センター感染症科の宮入烈先生には「米国と日本の対比」、千葉大学医学部附属病院感染症管理治療部の石和田先生には「大学での教育・研究・診療」をキーワードにご講演いただく予定です。またシンポジストの先生方のお話を受けて、北里大学北里生命科学研究所・大学院感染制御科学府の砂川慶介先生から、これからの小児感染症医への期待を語っていただきます。

今後の小児診療の中で感染症医を目指す皆様にとって、多くの参考になる情報が詰まった夢と希望にあふれる楽しいシンポジウムになると思います。是非多くの会員の方たちにお集まりいただきたいと幸いです。